Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ19　まえがき
Author(s)	秋田, 茂; 飯塚, 一幸; 堤, 一昭
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2022, 19, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91439
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

まえがき

本書は大阪大学歴史教育研究会の活動報告書の第19冊である。

大阪大学歴史教育研究会は、歴史学と歴史教育をめぐる「高大連携」を推し進めるための恒常的な討議・協働の場として設立された。毎月1度の例会は、2005年の設立以来2022年の3月で141回を数えるまでになった。この間多くの大学教員、研究者、大学院生、高校教員がこの会に関わり、発表や討論を重ねてきたことで、会の活動は年を追うごとに充実したものとなっている。

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、本研究会の開催形態も、昨年度に引き続きZOOMを利用した完全オンライン開催で実施した。対面での議論が不可能であるというデメリットはやはり非常に大きいものの、研究会のオンライン開催が定着したことで、全国から報告者・コメンテーター・参加者を迎えることができた。それにより、各分野の最新の研究動向や成果の紹介を揃え、活発な議論を交わすことができたのである。

月例会以外の場でも、高大連携歴史教育研究会や全国歴史教育研究協議会大会などに本研究会の関係者が多数参加し、また堺市博物館をはじめとする外部組織と連携した活動を活発に展開した。それらに関する詳細は、巻末の活動記録を参照されたい。

今年度は、4月から7月にかけて、大型の特集「岩波新書「シリーズ中国の歴史」から考える新しい中国史」を企画した。これは2019年から2020年にかけて刊行された岩波新書「シリーズ中国の歴史」を手がかりに、新しい中国史の研究・教育について考える連続企画である。近年研究の進展が目覚ましい中国史について、王朝交代史観を超えた「多元性」の観点から編まれたこのシリーズは、研究者と教員の双方に対して旧来の中国史像の刷新を迫る大きなインパクトを与えるものとなっている。その点を踏まえ、このシリーズの成果を検討・批判するとともに、教育の現場へと還元する術を探るべく企画したものである。

本企画を実施するにあたっては、シリーズの著者である渡辺信一郎氏、岡本隆司氏、丸橋充拓氏、古松崇志氏に研究会でご講演をいただいた。それらはいずれも著書の内容の紹介や補足にとどまらず、それが執筆された学問的・教育的な背景や、今後の課題や発展の見通しまでが語られる意義深いものであった。

4名の執筆者に加えて、4月には現職高校教員の矢景裕子氏・田中穣氏・下岸廉氏から勤務校の状況を反映した「中国史を教える上での課題」を提示していただいた。さらに5月の渡辺信一郎氏の講演では、吉野秋二氏、満田剛氏からそれぞれ日本史研究者、中国史に精通する高校教員という立場で有益なコメントをいただき、7月の岡本隆司氏の講演の際は、杉山清彦氏から「ユーラシアの大清帝国」という観点から清朝史について講演をいただいた。

この企画を行った例会では、いずれも多くの方にご参加をいただき大変盛況であっただ

けでなく、質疑応答や討論の際に参加者から寄せられた質問は、研究会での議論を充実させるのに大きく寄与するものであった。改めてシリーズ執筆者の先生方、そしてご参加をいただいた皆様に深くお礼を申し上げたい。

さらに、今年度も大阪大学の歴史系の学生を中心とする大学院生によるグループ報告を行った。今年度の課題は上記の大型企画を受けて「岩波新書『中国の歴史』と世界史・日本史」に設定し、シリーズを読み著者の講演を聴講したうえで、中国史を日本や世界の他地域と比較して相対化し、さらにその成果を教育現場に還元する方策を提示することを要求した。2つの学生グループは、それぞれ「中国の古典国制と都城制」「清朝の近代化」をテーマとして選定し、半年間に渡る準備の上で、12月に開催された第139回例会でグループ報告を行い、次にそれをもとにしたレポートを共同執筆した。本報告書にはこの成果となるレポートを掲載しているので、ぜひご一読を賜りたい。いずれのレポートも中国史だけでなく他地域との比較の視点が盛り込まれ、さらには「教科書記述への提言」「章末コラム・特集の提案」がそれぞれ行われている。今年度のレポートが、歴史学を専攻する学生が専門を超えて共に学び考え、さらに教育現場への還元にもチャレンジした先駆的な成果として、全国の教員に参照されるものとなれば幸いである。

なお、グループ報告の際には、シリーズの著者の先生方にもご参加いただき、学生の報告に対して貴重なご意見やアドバイスを賜った。衷心より感謝申し上げるとともに、本書に収録する2編のレポートが、先生方の眼鏡にかなう内容であることを願ってやまない。

最後に、2021年度の活動にあたり参加・協力して下さった研究者、院生・学生、高校教員、事務職員ほかすべての皆さんに、あつくお礼を申し上げるとともに、目下の新型コロナウイルス感染症による混乱が早期に終結し、教育現場も平常に戻ることを祈るしだいである。

2022年5月　秋田茂・飯塚一幸・堤一昭